

## 歴史に残る鉄砲戦：大坂の陣

1614年から1615年にかけて行われた大坂の陣は、16世紀後半から17世紀初頭にかけて権力争いをしていた2つの大名家の最後の激突であった。勝ったのは徳川家康（1543-1616）。家康は火器の力をよく理解していた。大坂城を攻めるとき、ヨーロッパから大砲の砲台を持ち込んだ。この戦いは、長い間のライバル関係の結果であった。その15年前、家康（1543-1616）はライバルである豊臣家を抑え、日本の支配権を手に入れた。豊臣家に残された砦は、大坂城のみとなった。しかし、家康は豊臣家を脅威とみなし、1614年、豊臣家を徹底的に滅ぼそうと動き出した。徳川軍は大筒と呼ばれる大口径の火縄銃など、より優れた新型の鉄砲を持ち、オランダやイギリスから入手した大砲10門とともに、日夜、城に砲撃を行った。この砲撃で、城の重い石造りの土台には被害がなかったが、木造の上部構造物には被害があり、城の守備隊の士気も低下したと言われている。当主の母親、淀殿の居室を破り、茶箆筒を壊してしまったという話もある。結局、城は燃え、豊臣家の若き当主、秀頼（1593-1615）は切腹した。